イベントレポート
スルツスキー大会
2004年1月10-12日

雪・北海道・スキー

北海道OL協会
山田健一（運営責任者）

スキーO シーズン開幕を切ったルスツ大会。楽しい雪とのふれあいの裏には、運営者の努力がある。舞台裏から見るルスツ大会は苦労の連続だった。

2004スキーオリエンテーリング
北海道選手権大会
2004年1月10日（土）-12日（祝）
北海道虻田郡留寿都村ルスツリゾート

「期待」と「混乱」

季節は巡りSki-Oのシーズンが到来した。磐梯高原・真室川・ルスツと日本三大Ski-O聖地と数えてよいぐらいルスツでのSki-O大会は定着したと言えよう。３回目を数える本大会は「ＪＯＡ公認大会」というひとつの挑戦を検討していた。JOAという組織ではここ数年スキーO委員会は開催されておらずSki-Oへの関心は非常に低いのが現実である。JOAにSki-Oへの認識を高めてもらうべく、日本でのSki-Oの新たな歴史の一歩を刻むべく激論の末２日目ロングのみ「ＪＯＡ公認」大会として開催することになった。しかし、公認化によって期待される効果は「将来への期待」にすぎない。現行のフットの大会をベースとした規定は全くスキーには馴染まず、コントローラ・競技者登録に始まりあらゆる点で現実にそぐわない点が露呈し参加者に混乱と負担を強いてしまった。

後に述べるが結局競技不成立にしてしまったため公認化の是非を論ずるにも至らない結果となってしまったが、今回の試みがSki-O発展の礎とならんことを切に希望したい。そして二度とこんな嫌な思いをすることの無きよう競技規定改定の折には微力を供したいと思う。

雪不足のち大雪

今シーズンの北海道道央・道南地区は記録的な少雪で大会開催が危ぶまれた。スキー場であるルスツリゾートもスキー場開きが幾度となく延期され営業上大打撃を受けていたという。我々もクマザサが頭を出しているテレイン状況では圧雪車の進入が出来ず、競技性の確保に頭を悩ませていた。しかし、年間の降雪量はそう変わらないもので大会2日前に「ドカ雪」が降り運営者は胸をなでおろしていたのだが・・・。

2004 Ski-Oシーズンの幕開け

おなじみの会場である体験工房に全国各地から参加者が集まってきた。ちょっと吹雪交じりの天気だが足馴らしのスプリントには支障ない。

きれいに圧雪されたスタートエリアから選手が次々と山に向かって駆けていく。ウィニング15分ほどのレースだがスピード感あふれるレースをMEはグスタフソンが貫禄を見せて堀江守弘（東北大）を抑え、WEは白鳥桂子（水篤刈）がスキーのセミプロ成瀬美希（チームパッシュ）の追撃をかわした。

天候がだんだん荒れてくる中トップから初心者まで30分程のレースは「嫌にならない程度」の楽しい大会であった。

ME

1	Bjorn Gustavsson	春日部	0:15:33
2	堀江守弘	東北大	0:17:02
3	山田敦史	青葉会	0:17:55

WE

1	白鳥桂子	水篤刈	0:16:30
2	成瀬美希	パッシュ	0:17:39
3	大里真理子	京葉	0:21:04

M21N

1	中町和雄	みちの会	0:18:05
2	八神遙介	東北大	0:22:49
3	齋藤祐也	東北大	0:24:14

W21N

1	金子恵美	上尾	0:32:22
2	片岡由起子	渋谷で走る	0:32:32

M35N

1	羽鳥和重	川口	0:19:18
2	茅野耕治	ワンダラー	0:25:03

M50N

1	三澤儀男	日立工機	0:15:44
2	酒井克明	Team白樺	0:37:02

W50N

1	酒井か代子	Team白樺	0:38:54

M21NS

1	橘直隆	つくばROC	0:18:11
2	渡辺英男	鳩の会	0:18:46
3	湯沢友豪	東北大	0:27:50

W21NS

1	小林正子	ES関東	0:49:05
体験A	諏訪高典	大阪市	0:27:18
体験B	飯田遼一	東北大	0:19:20

2日目は大雪！

50cm以上降った前夜からの積雪は凄まじかった。昨日使用したスタートエリアにたどり着くのにすら雪を漕ぎ漕ぎ30分もかかってしまい時間内に圧雪できなかったのだ。

スプリントレース 小林岳人（ES関東C）

モービル圧雪部隊の信原はもっと悲惨だったらしい。信原が先頭を走りその後ろをモービル隊４台が圧雪幅を広げるべく新雪を踏み進んでいたが、新雪が深すぎてスタック（空回りで進めなくなること）しまくりだったらしい。しかも、後続のモービル隊ですらスタックするぐらい悲惨な積雪状況で脱出のためモービルを持ち上げてすぎて信原の腰は若くして使い物にならなくなったとか・・？

かくいう私も人力圧雪でシュプールトラックを付けに山に入ったのだがスキーを履いていても膝まで埋まりちっとも前進しない。最初は「ツッパることがオトコ～の～♪（松嶋菜々子）」と歌いながら進む余裕はあったが、迫り来るスタート開始時刻と遅々として進まない圧雪に次第に疲労と焦りを隠せなかった。

携帯が通じない！

そこに本部より携帯に電話が入ったのだが着メロは鳴り、フル充電のマークがあるもの通話の途端電池切れとなり通話不能となってしまったのである。厳しい寒さのせいなのだろうか？（ポケットに入れといたのに・・屋内に戻ると普通に使えた）信原の携帯も同じ症例だったらしく山に入っている二人とも孤立してしまい、スタート時刻繰り下げの指示を出せなかったのが事の次第である。

地図通りのトラック圧雪が未了のままスタート開始となりポ確の余裕もなく、中にはパンチユニットが脱落し雪に埋没したコントロールもあり著しく不公平感が拭えなかった。

先に述べたようにメインとなる２日目ロングを不成立にしてしまった。公認料を支払わせながら大会不成立を出したことに罪悪感一杯で、参加者の皆様には大変申し訳ないことをしてしまいこの場を借りて深くお詫びしたい。

注目の選手・三浦裕司

競技自体は不成立となったが、ME トップはトライアスロン・アドベンチャーレース出身の三浦裕司（チームパッシュ）。札幌市内高校教諭の彼は北海道内の肉体派レース上位常連で昨年からパーク-0 大会にも参加していた。Ski-0 初参加にも関わらず本大会に向けて地図読みをし、武石さんから中古のマップホルダーを取り寄せるほど真面目に準備をしたらしい。オフトラックの雪漕ぎも慣れており当日の積雪にも違和感がなかったというから恐れ入る。結果３日間の成績と総合してやや期待先行の感はあるが世界選手権代表に選出された。ただ、彼はこの１年間で相当の成長を遂げるオリエンティアとなるだろうことを私は確信しており、来年の世界選手権が楽しみだ。

三浦裕司（チームパッシュ）
マップ交換所での力強い滑り

最終日・終わりよければ・・？

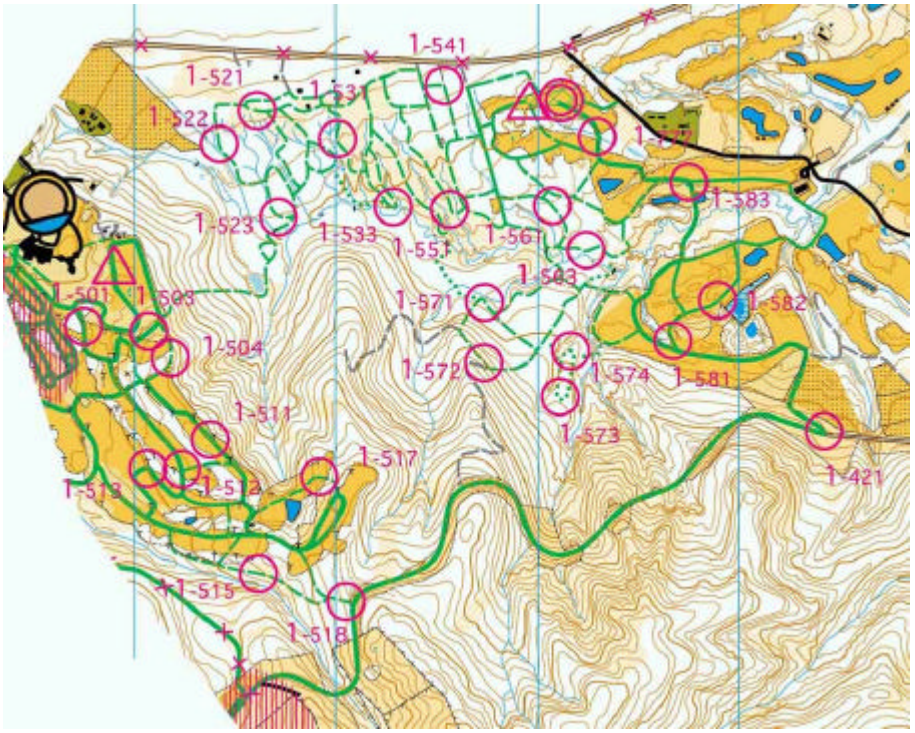
ロング終了後の激しい降雪は夜半には止み、翌朝は冬晴れのスキー日よりとなった。圧雪範囲も狭め計画通りに圧雪が完了しコントローラの幸山も参加できないのを残念がるほどベストコンディションの大会となった。

本レースの E クラスは「Ski-0 マススタートイベントのガイドライン」に従いコースセットされ、前日のスタート位置抽選により A-B もしくは B-A パターンが決められマップ交換のバタフライ形式にて競われた。

師を越えた！　堀江！

9:40 の一斉スタートの後、最初にマップ交換に現れたのは堀江ですぐ後をグスタフソンが追う展開。その後、元木悟・三浦裕司・酒井佳子・山本賀彦・宗形竜憲・山田敦史と続く。

WE は元木友子・白鳥桂子の順に通過し新妻直接対決。一般クラス参加者も続々とゴールする中、今年のショート J-Cup を征したのは堀江だった。完全に師グスタフソンを超えたと言ってよいだろう。グスタフソンは堀江から遅れること１分でゴール。3 位は元木悟。ME に出走した酒井佳子も 4 位で女王の地位は不動である。WE 直接対決では白鳥が元木友子を後半交わして秒差で逃げ切った。この 2 年間白鳥は本当によく頑張ったと思う。Ski-0 の為ならダンナも泣かし世界選手権を引退試合に目標を定め合宿・自主トレに励んできたのだ。



ロングディスタンスの全ポ図(1:15,000)　中央 571・572 付近の圧雪が追いつかなかった

ショートディスタンス マススタートの模様

ME
1 堀江守弘　東北大　0:31:47
2 Bjorn Gustavsson 春日部　0:32:55
3 元木 悟　Team 白樺 0:35:20

WE（注：男女同コース）
1 白鳥桂子　水篤刈　0:44:49
2 元木友子　Team 白樺　0:45:04
3 大里真理子　京葉 OLC　0:55:34

M21N
1 中町和雄　みちの会　0:31:36
2 八神遙介　東北大 OLC　0:37:56
3 齋藤祐也　東北大 OLC　0:41:43

M35N
1 羽鳥和重　川口 OLC　0:30:09
2 茅野耕治　ワンダラーズ　0:34:26

M50N
1 三澤儀男　日立工機 OLK　0:33:20
2 酒井克明　Team 白樺　0:37:24

W50N
1 酒井か代子　Team 白樺　0:47:08

M21NS
1 橘直隆　つくば ROC　0:28:39
2 諏訪高典　大阪市　0:30:18
3 渡辺英男　鳩の会　0:30:43

体験 B
1 飯田遼一　東北大 OLC　0:29:24

本大会の結果を参考に 2 月の世界選手権代表に選考されたのは既に選考されていた丸山哲史・酒井佳子に加え、元木悟・山田敦史・三浦裕司、白鳥桂子・元木友子が選出された。

グスタフソンは競技不成立を詫びた私に言った。「Everything good. Don't mind. But very very bad things…」と堀江の優勝カップを指さした。

こうして冬の北海道３日間大会は数々のトラブルを雪の中に隠し、終わり良ければ（とりあえず）全て良しで和やかに終了した。だが、雪の中に隠しきれない問題点を下記に述べたい。

堀江守弘 東北大 OLC）
ラスポからウィニングランへ

Very very bad things…？
堀江へ優勝カップの授与と
背後のグスタフソン

冬山で大会を開催する危険

「冬山遭難」この時期よく耳にするニュースだが、この大会までは冬山登山するわけであるまいし別世界の不注意事故だと思っていた。

競技不成立に落胆したのは先に述べた通りだが、私は運営責任者として非常にショックな事があった。渡河点の橋から酒井佳子・成瀬美希が川に落ちたというのだ。また、チャンプ堀江もオフトラックで川に突っ込んだという報告を受けているし、かくいう私もシュプール圧雪中に渡河点を誤り川に落ちかけている。

件の川は冬でなければ別に大したことのない川幅で落ちても笑い話で済むだろう。しかし、氷点下の厳冬期では川の両岸に雪が堆積しており場所によっては水面から3mぐらいの高さとなる場所もある。落ちた 3 人は皆スキーのベテランだからこそ川から這い上がって寒さに凍えながらも無事ゴールできたのだろう。だが、我々は一方で老若男女初心者大歓迎と参加者を集めている。もし猛吹雪の中初心者が川に落ちてケガをして動けなくなったら真面目に命に関わる問題となる。

例に挙げて恐縮だが、もし、武石さんの孫の幸くんが川に落ちていたら無事に帰ってこられただろうか？　川でなくても山の中で動けなくなって悪天候の中体温が奪われて・・という危険を今まで想定したことがあっただろうか？

事実、午後 2 時過ぎから車の運転を躊躇うほどの猛吹雪となる中、参加初経験の北大生が未帰還者として捜索対象となっていた。幸いに 3 時頃（日没１時間前）には発見されたが、もし彼がケガをして動けなくなっていたらと考えると今でも自分は運営責任者として冬山で大会を開催している危険の認識が欠如していたことを反省させられる。

信原が苦労しているように吹雪になればモービルトラックなんてあっという間に消えてしまい、地図上でのリロケートは著しく困難となる。視界不良の中、安全回路の国道へコンパスワークのみで脱出するにもトラックから外れて腰まで埋まる雪をかき分け進むのは激しく体力を消耗するし精神的にも持たないだろう。

食を征する者はレースも征す　左から大里・白鳥・成瀬・酒井

競技の特性上運営側が安全策を講じるにも限界があるが、せめて参加者にホイッスル携帯を義務化し、すぐ救助できる体制を準備するのは冬山での運営責任上必須であると考える。そして、大会を中止する勇気の重要さを一昨年菅平でのインカレショート大会を思い出しながら改めて認識する次第だ。

「たら・れば」の話だが、もしスタートを１時間繰り下げていれば競技は成立したかもしれない。しかし、猛吹雪に見舞われ未帰還者はもっと増えていただろう。参加者の安全を考えると不謹慎ながら不成立でも仕方がなかったかなと今更ながらに思う。

今回もし低気圧がやって来るのが 2 日早かったら参加者は帰宅できず 2 日間新千歳空港で缶詰だっただろう。

例年の番組からすると 3 月は 2 週目にインカレ、3 週目にインターハイ、その次週の連休に全日本大会という編成となっており連休は 1 月の三連休以外に Ski-O が入り込む余地はない。北海道内のクロカン大会とのバッティングを避けるためにも 2 月は避けることが望ましいし、クロカンスキーヤーにアピールすることを考えると 3 月開催は望ましい。果たして 3 月 1 週目・もしくは 3 週目の土日開催で参加者は集まってくれるものだろうか？

大会開催日を考える

昨年は１月末の土日に２日間で開催したが三連休のニーズに応えられず寂しい大会であった。世界選手権前の最終選考ということもあり、ここ３年間１月にルスツで大会を開催してきたが来年の１月三連休は全日本リレー大会という番組編成のため、Ski-O 大会番組編成の変更を余儀なくされている。また、競責の信原曰く深い新雪となる１月は圧雪に適さず、できれば雪が固く締まる 2 月下旬から 3 月が好ましいそうだ。確かにフカフカの新雪のため参加者もストックでの推進力が得られず苦労している。また、気候の問題からも１月･2 月は悪天候となる確率が高い。この 3 年間一回も全レース好天だった年はなく、必ず 1 日は圧雪に苦労させられているし、

「カシオペア」で北海道へ

12 月のとある日、Orienteer-ML に「カシオペアツインのチケットを１部屋余分に確保してます」の一文が流れた。

格安に北海道へ渡る情報を提供していた私は北斗星を使って格安に来ることは勧めていたが「カシオペア」とは恐れ入った。カシオペア組は羽鳥・小林両家族と金子・片岡嬢が北海道への道程を満喫したらしい。新婚気分の残る元木夫妻も奮発してタワーホテルに宿泊し楽しいリゾートライフを過ごしたらしいし、酒井親子の両親は Ski-O 参加、子供はスノボやカニ食べ放題の食事を期待して連休を楽しんだという。ルスツリゾートという所は Ski-O 以外の楽しみも提供できるのだ。昨年の Do-Ringen でも思ったが、競技性の確保は当然としていかに家を出てから帰宅するまで「北海道を満喫」してもらえるような大会作りが本州からの参加者確保のカギではなかろうか。これからも北海道協会は競技だけでなく「北海道を満喫」してもらえるような大会開催を心掛け、みなさんのご参加をお待ちしたい。

（山田健一）

家族で雪と戯れる羽鳥和重　(川口 OLC)